

歌とその源流―阿蘇瑞枝氏。本文中に挙げた青木生子氏の論。解
 釈と鑑賞第三五卷三号昭四五・七月「万葉の挽歌」所収の伊藤博
 氏。吉田義孝氏。橋本達雄氏の論など。

(9) 『岩波講座日本文学史』第一卷所収「柿本人麿」西郷信綱氏。

国語と国文学第四十九卷十号昭四七・十月「天智挽歌群について」
 曾倉岑氏。氏は系譜としての女の挽歌の存在とその優勢さを認める
 立場をとられる。

(10) (注8の阿蘇氏論)

(11) (注8の青木氏論)

万葉集卷七行旅歌群

——制作時期をめぐって——

一、序

万葉集中には行旅の際に作られたと思われる歌が数多く見受けら
 れる。比較的まとまってあるのは、巻一・巻六の行幸従駕の際の応
 詔歌、巻三・巻九に見られる官人の行旅歌等であるが、これらは巻
 九を除いては作者名も作歌事情も明らかであるものが多い。巻九の
 行旅歌の多くは人麻呂歌集のものだが、作者名、作歌事情は他と比
 べて簡略なものとなっている。同じく行旅歌としてまとまっている
 のは巻七であるが、この巻の場合は他と違って、作者名も作歌事情

(12) 「后たち」フタジノイリビメノ命・オトタチバナヒメノ命・フタ

ジヒメ、オオキビタケヒメ、ククマモリヒメ

「み子たち」は、右の後たちを母として、タラシナカツヒコノ命(仲

哀天皇)・ワカタケ(ル)の王・イナヨリワケノ王・タケカイコノ王

・アシカガミワケノ王・オキナガタワケノ王

(13) (注8)の橋本達雄氏論

(14) 解釈と鑑賞第二十一卷十号昭三一・十月「渡津見の豊旗雲にの歌

の解釈をめぐって」吉永登氏。古典と近代文学第六号昭四五・二

月「万葉集の背景」同氏。

高野正美

も極く少数を除いては不明である。この巻七の行旅歌群は作者不明
 という点で他と違っているばかりでなく、自然詠があるという点で
 も大きく相違している。自然詠が他巻の行旅歌にないというのでは
 ない。たとえば、高市黒人の歌などその代表的なものになるが、巻
 七のそれは黒人のとは違って、自然の美が感動の対象となっている
 る。この自然が美の対象となるのは尋常でなく、そこには明らかに
 自然観の変化が看取される。こう考えると、巻七の行旅歌群は万葉
 史の上でもかなり重要なものと思われるのだが、管見の及ぶ範囲で
 は制作の時期についても、その歌群の意味や万葉史上の位置につい

西歴	年号	行幸地	万葉歌	備考
六八六	持統三	吉野2 高安城	紀2	
六八六	...	吉野5 泊瀬 紀伊	吉②2?	
六八二	...	藤原宮地	伊3	
六八二	...	新益京路 高宮 伊勢		
六八二	...	阿胡行宮 吉野3 飛鳥		
六八二	...	皇女の田莊		
六八三	...	吉野5 藤原宮地 多武嶺		
六八四	...	藤原 吉野3		
六九五	...	吉野5 宇陀吉隱		
六九六	文武	吉野3 二槻宮		文武即位
六九七	...	宇智郡		
六九八	...	難波宮	難5	
七〇一	大宝	吉野3 紀伊	紀20	
七〇二	...	吉野 三河	三4	持統没

二、賛歌の偏在

ても十分解明されているとは思えない。以下この問題について考えてみたいのだが、当時旅といえ、従駕か官人の公務が主であったろうから、巻七の行旅歌群も当然衆庶の物見遊山などの折の作でないことは明らかである。つまり、何らかの形で宮廷に關与した人々の作であることになるわけで、それらの万葉史上の位置を知るためには、当時宮廷に關与した者の歌の実態を知る必要がある。年代の明らかなのは従駕歌なので、そこに手がかりを求めようと思う。

西歴	年号	行幸地	万葉歌	備考
七五五	慶雲二	倉橋難宮		元明即位 (七〇七)
七五六	...	内野 難波		
七五八	和銅一	菅原 平城巡幸 山城岡田	難5	
七五九	...	春日		
七六〇	...	平城宮2		
七六二	...	高安城		
七六三	...	斐原		
七六四	...	斐原		
七六五	...	斐原2		
七六六	...	難波 美濃 和泉		
七六七	養老	難波 美濃 和泉		
七七八	...	和泉		
七七九	...	吉野		
七八〇	...	吉野 紀伊		
七八一	神亀	吉野 紀伊	吉②1 8	
七八二	...	難波	吉③2 4 5	
七八三	...	播磨印南野	印②5	
七八四	...	斐原	難④4	
七八五	天平	難波	難⑥6	
七八六	...	斐原 吉野	吉①1	
七八七	...	松林		
七八八	...	斐原2		
七八九	...	難波 相楽別業 伊勢	伊8	
七九〇	...	宇治及び山科	斐①1	
七九一	...	石原 紫香樂2 刺松原		
七九二	...	紫香樂3 鴨川		
七九三	...	難波 和泉 安曇江 紫香	久邇①1	
七九四	...	楽、智努2 仁岐河 甲賀	久邇②7	
七九五	...	久邇宮還 平城 難波	難①2	

(右大臣)

長屋王(左大臣)(右大臣)

聖武即位

元正即位

元明即位 (七〇七)

七六	...	一八	金鐘寺		
七四	...	三〇	葛井広成宅		
七九	...	三二	東大寺3 薬師寺	吉①	
	天平勝宝一		河内知識寺 大郡宮	2	
			大郡宮還 春日酒殿		
			東大寺		
			東大寺		
			東大寺		
			難波 堀江の上		
			知識寺		
			河内3		
← 橘諸兄(左大臣)					

(注) (1) 行幸地の数字は回数を示す。無いのは一回を意味する。
 (2) 万葉歌の 紀||紀伊 吉||吉野 難||難波 三||三河 聖||聖原 印||印南野
 を示し、下の数字は歌の数を示す。但し○印は長歌他は短歌である。また、吉
 等とあるのは、統紀に行幸の記事なく、万葉集のみにあるものを示す。

額田王は別として二期を代表する宮廷詞人に人暦、三期のそれに
 金村、赤人、千年を、四期に福麻呂をあててみると、宮廷詞人は各
 時代に満遍なく存在したかの如く思えるのだが、ここに陥穽があ
 る。宮廷詞人は公の席で歌を召された人であり、賛歌を奉ることは
 彼等にとってもっとも晴がましい行為であった。この賛歌だけを見
 ると先の表で明らかのように、二期では確実でないが或は持統五年
 かと思われるものに人暦の吉野賛歌があり、年代不明のものとして
 は、同じく人暦の長皇子、新田部皇子への賛歌(3三九~四一・3三六~
 三 持統大皇への献歌(3三三)がある。人暦の歌で年代の明らか
 作は文武四年の明日香皇女の挽歌であり、持統の没したのは二年後
 の大宝二年である。この期は表面上は文武朝だが実質的には持統朝
 といえるので、人暦は持統朝の終焉と共にその作家活動を閉じた
 といえる。先の賛歌とても実質的な持統朝のものと考えてよからう。
 また、作者不明のものに藤原宮の役民の歌(1三〇)藤原御井の歌(1

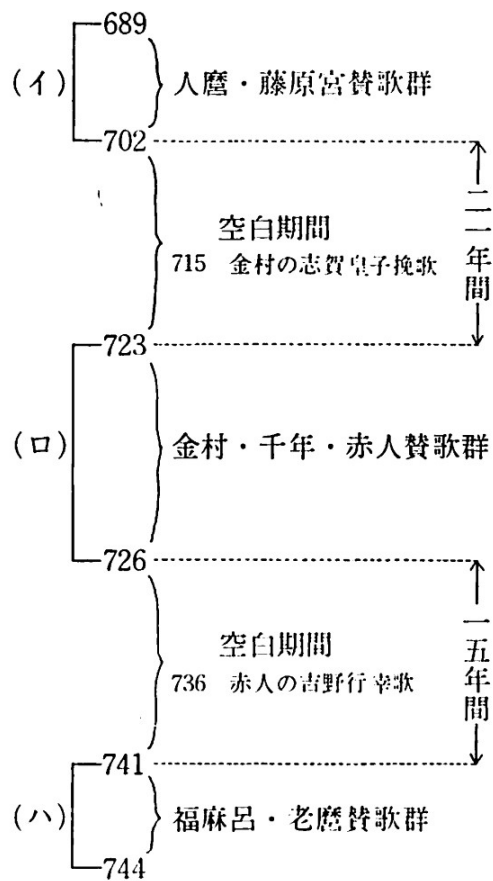
三・三)があり、共に藤原宮に関する賛歌である。これらの制作年代
 も不明だが、藤原遷都は持統八年(六四)のことであり、やはり問題
 なく持統朝の作である。

次の三期では養老七年(七三)金村、千年の吉野行幸の折の作があ
 り、以後神龜三年(七六)印南野行幸までの間に集中する。というこ
 とは、二期から三期にかけて二〇余年の空白期間が存在することに
 なる。一方、宮廷詞人と称されるものに挽歌の制作があるが、挽歌
 においても人暦の場合、明らかかなものは文武四年(七〇)明日香皇女
 (2二六~二七)のを最後として、持統崩御(七三)を下るものではない。

金村のものには靈龜元年(七五)志貴皇子の挽歌(2三三~三三)がある
 が、この場合にも一五年の隔たりがある。三期には金村以外に公
 的挽歌はなく、金村の歌とても以後は先述以後のもので、この志貴
 皇子の挽歌だけが飛び離れてあるわけで、やはり、二期から三期へ
 の空白は大きい。

三期から四期にかけては、天平八年(七六)の赤人の吉野行幸歌が
 離れてあり、次にまとまって登場するのは天平一三年(七四)から数
 年の間に、境部老鷹や家持、田辺福麻呂等のものである。聖武天皇
 は在位期間中表でも明らかのように、各地への行幸がみられるが、
 即位した神龜元年(七四)のを除くと、吉野行は天平八年のものだけ
 である。これとても正史である統日本紀に記録はなく、万葉によっ
 て知るのみである。この吉野行の目的は明確でないが、何か特別の
 意味があったのではないかと思われ、その折赤人が古風にのっとり
 賛歌を献上したのも、他の行にまったく賛歌がみられない以上何か
 意味ありげだ。そこでこれを除外して考えると、神龜元年の賛歌
 群と天平一三年以後数年間の賛歌群とは、やはり一五年程度の空白

期間が存したことになる。
以上のことを整理すると次のようになる。



初めの二〇余年の空白期間は文武、元明、元正朝に渡った長期のものであり、単なる資料の不備不足等による偶然というだけでは済まされない問題だと思われるが、この事は後に詳しく述べるとして、ここではまず賛歌の偏在する意味について素描する必要があるので。

(イ)群の賛歌は人麿の作——持統天皇の吉野行の時のもの、雷丘に御遊の時のもの、長皇子の獵路池に遊んだ折のもの、新田部皇子の宴席で献上されたかと思われるもの——の他作者不明で藤原宮造營や完成後の儀式で歌われたかと思われる「役民の歌」や「御井の歌」がある。これらには後の賛歌に見受けられるあらゆる要素が備わっており、宮廷儀礼が急激に整備された当時をよく反映している。(ロ)群は吉野、紀伊、斐原、難波、印南野等への行幸の時のもので占められ、(ハ)群は恭仁の新京賛美の歌のまとめである。これら

賛歌群に共通するのは、多くが長歌で詠まれている点である。

長歌、短歌の機能を考えてみると、偏在する賛歌群が長歌を主として成り立っているというのは重大だ。短歌が多く日常的な所謂喪の場のものであるのに対し、長歌の多くは晴れの場で献呈されたものだからである。長歌を主とした賛歌が晴れの儀礼における短歌である点、同じく宮廷に関与した者の歌でも生活性を荷なった短歌との区別は歴然としている。このように考えてきた時に見逃しえないのは、これら賛歌群の偏在は高市皇子(広くは持統朝)、長屋王、橘諸兄がそれぞれ政権を掌握している時期と重なるという事実である。これを逆に読めば藤原氏の政権下にはないということだ。この点に着目されたのは橋本達雄氏であり、氏は人麿の吉野賛歌の歴史的背景として、天武、持統朝における律令体制の確立とそれに伴った諸々の儀礼、行事の整備、制度化を考えている。⁽¹⁾同じく阿蘇瑞枝氏もこの期を歌謡や音楽に積極的な関心を示した時期といわれる。⁽²⁾吉野賛歌に限らずの賛歌群はこうした時代の雰囲気の中で献呈されたものであった。この時期は、また別な言い方をすれば、皇親政治の確立した時代ともいえる。次の群については、全体についてはないが、橋本氏は藤原不比等によって中断した、この皇親政治の復活を図った長屋王の政策の一環として、宮廷詞人赤人の出現を考えている。⁽³⁾このことは一人赤人にとどまらず、金村、千年などの宮廷詞人と同様であったろう。さらに、(ハ)群の福麻呂についても橘諸兄が政権担当者であったことと密接な関係のあることを指摘している。⁽⁴⁾つまり、公的な宮廷歌は天武朝を受け継いだ持統朝に確立し、そこに見られた所謂白鳳の皇親政治への回帰を願った長屋王や橘諸兄の時代に復活したわけで、いってみれば、それは常に白鳳期

が理想化され、その白鳳への憧憬が断続的に公的な宮廷歌を生んでいったということであろう。

このように考えてくると、空白期間の生じた意味は明白になるが、二期から三期、八世紀初頭、それをかりに人麿から赤人へと置きかえて考えてみても、形は継承されているにもかかわらず、歌そのものの内容にはかなり大きな変化が見受けられる。もちろん、それは時代の隔たりによる変化に違いないのだが、その変化をもたらした要因が何であったかと問いかけた時、空白期間を探る必然性が生まれてくる。ところで、空白期間の存在を明確にするために、ここでは賛歌に限定して考えてきたが、この空白期間は他の従駕歌を加えて考えても、その結果を大きく左右するものでないことは先の表から明らかである。この二期から三期にかけて、八世紀初頭の空白期間をうめるものは、古歌集を主とした巻七の行旅歌群であつたらうと私は考える。

三、歌群制作の時期

ところで問題の行旅歌群はすべて作者不明であり、確実にその成立時期を知る手がかりは皆無である。だが、幸いなことに「伊勢従駕作」「藤原卿作」「柿本朝臣人麻呂之歌集出」「古集中出」とかの左注があり、それによって漠然とはあるが推定の手がかりを得ることができる。伊勢従駕作(二八六)について、全註釈は伊勢行幸は持統六年と天平一二年であるが、天平一二年頃の作と証明されるものがないから持統六年だと推定している。伊勢のみを目的地とした行幸は右の二度だが、大宝二年には尾張、美濃、伊勢、伊賀をめぐって三河への行幸があつたし、養老二年美濃行幸の折にも尾張、伊

賀、伊勢を巡っているので、これらのいずれとも断定できない(沢瀉氏注釈)。藤原卿作の場合も事情はほとんど同様である。藤原卿については、早く契沖が北卿であるとし、房前を当てている(代匠記)のに対し、近くでは武田博士が、神亀元年の行幸に供奉して、大伴坂上郎女に贈った麻呂の作だとしている(全註釈)。また、沢瀉博士は一二二二の歌が古今六帖で「丸卿」となっているので、麻呂の可能性は十分あると考えている(註釈)。しかし、北卿というのは「北」の脱字ということでも単なる推定に過ぎない。神亀元年作というものは「右七首藤原卿」とある歌がすべて紀伊国での作であり、文献上では紀伊国への行幸は大宝元年の次は神亀元年で、前者では時期的に無理があるので後者を想定したものと思われる。だが、神亀二年の甕原、吉野、神亀四年の難波、天平一一年の高円、天平感宝元年の吉野⁽⁵⁾などの行幸は正史である続日本紀にはなく万葉集によってのみ知ることのできるもので、文献には多くの遺漏が考えられる(第二節表参照)。ということは、文献だけを絶対視した推定にも大きな限界があることは免れない。土屋文明氏は一連の歌のうち一二二〇の「由良のみ崎」について、「神亀元年は此所までは及ばず、大宝元年行幸の時の歌を巻九に載せた中にはユラノサキの作もある。此の七首を神亀元年とするには、此の地名は障害となる」といわれている(私注)。一方、古今六帖の伝えにした所で、時代が大きく隔たっているので有力なきめ手にはならない。また、武智麻呂や宇合にしても、それぞれ養老二年、神亀三年に式部卿を拝しており、宇合はこの四人の中ではもっとも多く万葉に作品を残している。この二人の可能性も十分考えられる。結局誰とも決定し兼ねるが、これら四人の出仕は文武朝から元正朝の間であるので、この歌もその頃の

ものという極く大まかな限定は認められるであろう。一連の歌の中、

若の浦に白波立ちて沖つ風寒き夕べは大和し思ほゆ（二三〇）
は、慶雲三年、難波行の時の志貴皇子の作、

葦辺ゆく鴨の羽がひに霜ふりて寒き夕べは大和し思ほゆ（一六〇）
と下二句を等しくしている。藤原卿が四兄弟のいずれであるにせよ、その出仕の時期からみて、志貴皇子より以前の作とは考えられないので、当然この歌は皇子の作を念頭にしているものであったと思われる。

黒牛の海紅にほふもしきの大宮人しあさりすらしも（三三〇）
では「紅にほふ」と宮女たちに目をうばわれているが、大宝元年の紀伊行の作

黒牛鴻潮干の浦を紅の玉裳裾引き行くは誰が妻（九二五）
では「紅の玉裳裾引」く一人の宮女に焦点がしぼられている。この点では違うが、青い海に映える紅、その紅の裳をつけた宮女の華麗な姿に心を寄せる着想に相通するものがある。恐らくこの歌の作者は大宝元年の歌などをも聞き知っていたの作に違いない。というのも、

わが舟の楫はな引きそ大和より恋ひ来し心いまだ飽かなくに
（三三三）

でいう「大和より恋ひ来し心」とは、この地の景観の美しいことを聞き、大和にあっては見ることでできない海浜の景に大きな期待を寄せてやって来たという意であろうから、当然、それ以前に詠まれたこの地の歌に無関心でありえなかったと思われる。「大和より恋ひ来し心」という表現には、紀伊国の美しい景に多くの人々が関心

をいだいていて、しばしば耳にするといった背景を感じさせる。続日本紀によれば、紀伊行は大宝元年の次は神亀元年で、その間二三年間の空白がある。この間にまったく紀伊への行幸が行なわれていないとすれば、二三年も隔てて突然紀伊国が想起され、作者の関心を呼んだというのでは随分不自然ではないか。多分、大宝元年の行幸後余り隔たらない時期——大宝元年には文武天皇の母である阿閉皇女（元明）も同行したと思われるので、元明朝にも行幸があったのではないかと想像される。想像を重ねるような結果になってしまったが、歌の内容からしても一連のものが、二期から三期にかけて、つまり八世紀初頭のものであることは、以上のことからしても間違いない。

万葉集編纂の資料となった歌集には、金村歌集、虫麻呂歌集、福麻呂歌集のような個人の歌集の他、類聚歌林のように多くの歌を集め分類したものもある。人麻呂歌集や古集、古歌集は後者の類である。類聚歌林は養老末から神亀初めの頃のものとして推定されるが、金村以下の個人の歌集は後のものであり、類聚歌林は成立時期の限定されるものの中では最初の歌集ということになる。古事記が完成し風土記の編纂が命ぜられ、やがて日本書紀の成立をみるという元明、元正朝は、古い宮廷の文化的なものを縦軸に、地方の文物を横軸として、両者の総合の上に次の時代を準備していた時期でもあったが、古万葉といわれる巻一・二もこの頃成立したものである。その類聚歌林もこの気運の中で憶良の企画したものであった。その内容は宮廷関係の歌を主とした類聚で、詳細な注も施されていたらしいが、そもそも歌集を編むという意識が明確になったのはこの期を隔たった以前に想定することは困難である。したがって、個人の

集でない半ば公的な歌集に刺激されて個人の集が成ったというのが諸々の歌集成立の過程であったと思われる。もちろん、後にはこの個人の歌集を基に万葉の巻が編纂された(典型的なものに巻九がある)

こともあったが、そもそも初めはその逆であったと思う。この意味で人麻呂歌集は二重の疑惑を含んでいる。それは文字通り人麻呂の歌集という意味であれば、元明、元正朝の気運を待つことなく個人の集が成ったであろうかという素朴な疑いであり、一方、その内容は人麻呂個人の集ではなく、多くの人々の作や民謡と思われるものなど広く含まれている点、後の個人の集が他のものを含まないのと相違しているからである。(もともと金村歌集には他人の作も若干含まれているが、大部分は金村の作であり、人麻呂歌集とは本質的に相違する。)この名称の上では後に成立した個人歌集に近く、内容の点では先に成立した類聚歌林や巻一・二に近いという事実はその複雑さと共に成立の事情を暗示してもいよう。つまり、この歌集は古集や古歌集とほぼ同様のもので、人麿の活躍した持統朝の歌はもちろんのことだが、後の元明、元正朝の頃の歌までも含んだ歌集が、後に個人の歌集が編まれるようになった際、人麿に仮託されたものだと思う。巻二には人麿臨死の時の自傷歌からはじまって、死を悼む妻の作、人麿の心になぞらえての作などがあるが、このように人麿は死が伝説化されるほどに当時から一部の者の関心を寄せる人物であってみれば、仮託される条件としては十分であろう。古撰の巻一、二に歌集という名称が一ヶ所(2一〇)あるが、一般に注記は左注の形式を用いるのに対し、この場合は題詞に続いて記されている点異質である。これは後の注記であろう。行旅歌群の一首(二七)は人麿作(三五)と類似点がいくつか重なっただけでも仮託は容易に行な

われたであろう。つまり、巻七の人麻呂歌集歌(二七)は、一般に考えられているように人麿と同時代の作ではなく、後のものであるうと思われる。

古集、古歌集も人麻呂歌集とほぼ同様のもので、巻七編纂当時誰の集めたものかも名称もわからず、古いものであるという認定の下に名づけられたものであったろう。両者の共通点として、ほとんど長歌がなく、短歌しかも作者不明の歌が主であること、共に旋頭歌が収録されていることと、共通点に対応するほどの相違点が見当たらないことなどから想像出来る。

かくして左注を検討した限りでは行旅歌群はほぼ文武朝後半から元正朝、つまり、八世紀初頭に制作されたものと推定できるが、撰津作に含まれている次の歌からも同様の結果が見い出せる。

命をし幸くよけむと石ばしる垂水の水をむすびて飲みつ(二四) 窪田空穂氏はこの歌につき「美水を飲むと長寿を保ちうるとすることは神仙思想の影響があるものであるが、奈良遷都後はそれが一般の信仰となり、その意の歌が多い。」(評釈)といわれている。養老元年十一月の元正天皇の詔には次のような記事がある。九月美濃国に行幸した際、当耆郡多度山の美泉(養老の滝)で手や顔を洗うと皮膚が滑らかになり、痛い所は癒え、大変よく効いた。この水を飲み、水浴する者は白髪も黒くなり、禿頭にも髪がはえ、難病もたちまち癒える。聞く所によれば光武帝の時にも醴泉が出て、この水を飲む者は病がなおり、符瑞書でも水の精であるから老を養うべきだとし、これは大瑞であるから、靈亀を養老と改元するとある。元正天皇は翌養老二年にも美濃に行幸しているが、元年の詔の内容は先の歌とも符合するところがあり、この歌の制作時期を暗示してい

る。

以上、左注による外部徴証、表現にみられる内部徴証を総合してみると、卷七の行旅歌群は文武朝後半から元明元正朝、つまり、八世紀初頭のものであると推定できる。

四、卷七の行旅歌群

卷七行旅歌群は吉野作、山背作、摂津作とある一一三〇から一一六〇までの三一首と、羈旅作とある一一六一から一二五〇までの九〇首の範囲を含んでいるのだが、その他にも詠物歌の中にそれと思われるものが多く含まれている。例えば「詠河」に分類されてはいるが、吉野を詠んだ一一〇三～一一〇六の四首などはその典型的なものである。ということは大半を占めることになるわけだが、これらは行旅の作ということではらばらに集められたのではなく、既に卷七編纂以前に行旅の作としてまとまっていたものの一部分であると思われる。芳野作とある一一三〇～一一三四の五首の中、一一三三を除いて順に、み吉野の水分山・み吉野・夢のわだ・能野川とそれぞれ地名がみられるが、

皇祖すめらみの神の宮人とところづらいやとこしくに吾かへり見む(二三三)だけは、吉野での作であることを推定させる要素は何一つない。ということとは、これら吉野の作が編纂以前にすでに一連のものとして存したということであろう。次の山背作にはすべて地名が見られるが、摂津作の歌群に含まれている

梶の音そほのかにすなる海未通女あまきとめ奥つ藻刈りに舟出すらしも

(二三三)

には同様に、摂津の作であることを認める何ものもない。芳野作以

下これらの歌群はやはり編纂以前に、すでにあるまとまった歌群としてあったことは認めざるをえないであろう。次の羈旅作の場合はどうであろうか。出てくる地名によって地域を区切ってみると、それらがほぼ地域ごとにまとまっているという事実遭遇する。たとえば、

- | | | |
|------|----------|----|
| 一一八二 | 鞆の浦 | 安芸 |
| 一一八三 | 鞆の浦 | 安芸 |
| 一一八四 | 不明(地名なし) | |
| 一一八五 | 津の松原 | 摂津 |
| 一一八六 | 不明(地名なし) | |
| 一一八七 | 飽の浦 | 紀伊 |
| 一一八八 | 遠津の浜 | 紀伊 |
| 一一八九 | 猪名の湊 | 摂津 |
| 一一九〇 | 名子江の浜 | 摂津 |

といった具合で、その一部分だけからもそれは明らかである。といっても地域ごとに分類がなされているわけではない。播磨は四ヶ所に登場するし(二二六・二六九・三〇七・三三三)、同じ紀伊作でも玉津島は数首を隔ててあるといったぐあい(二三三・三三七・三三三)、むしろ分類はされていないといえる。一方、地名のない歌もあって、それらは一ヶ所にまとめられることなく、各所に散在している。こうしてみると、これらは地域による分類ではなく、前にある詠物による分類ではないかと思われるが、実はそうでない。とすると、散在する地名のない歌も前後の地名のある歌と関連あるものとして存したらしく思われる。つまり、羈旅作においても、行旅のたびごとに詠まれた歌を記録したものを、そのまま分類を施すことなく載せているわ

けで、ここでも編纂以前の姿がそのまま残っていることがわかる。要するに行旅歌群はすべて一首一首集められたものではなく、最初からあるまとまりをもっていた。しかも、それら各々のまとまりは人麿や黒人の行旅歌群のように、一人の作者が旅の途上で詠んだものの集合もあつたと思われるが、大部分はそうではなく、ある場所ので複数の人によって詠まれたものの集まりであつたと思われる。たとえば、次のような歌群がそれに当る。

今しきは見めやと思ひし吉野の大川淀を今日見つるかも

(二〇三)

馬並めてみ吉野川を見まく欲りうち越え来てそ滝に遊びつる

(二〇四)

音に聞き目にはいまだ見ぬ吉野川六田の淀を今日見つるかも

(二〇五)

蝦鳴く清き川原を今日見ては何時か越え来て見つつ俣ばむ

(二〇六)

「大川淀を今日見つるかも」というのは、かねて見たいと思つていた吉野川の淀を見る機会を得た喜びを詠んだものだが、一首隔つて「六田の淀を今日見つるかも」とあるのも同様の歌である。このことには同一人物が所を変えて詠んだという見方も出来ないわけではない。また、万葉集には相当数の類歌が見受けられることも事実だが、この類歌は同一人物の間で見られることは相対的にみて少なく、この場合にも別人の作と考える方が妥当であろう。「よを今日見つるかも」という詠が可能であるのは、吉野の地が風光明媚であるという共通の認識に支えられているからで、「大川淀」を歌うあの誰かの作は、その個人の感情であると同時に、吉野を風光明媚な

所として特別視している人々に共通のものでもあつた。一首は個人性と集団性を包み込んである。所を変えて六田淀が同様に詠まれるのも、この集団の一員であることにおいて可能なわけで、「場」の同一性がこの類同を生んだといえる。したがって、この歌の根底を支えているものは、模倣といつてしまつては当らず、いわば共有の感情とでもいべきものであつた。二首目の歌は「馬並めて……滝に遊びつる」という文字通りに受けとめてよい。轡を並べて連れ立ち滝に遊ぶ、その遊楽の姿を詠んだもので、この歌はその遊楽の集団に供されたものであつた。行幸従駕を含めた旅にあつて、しばしば家郷への思いや、残してきた妻や恋人たちへの思いにかられた感傷的な歌が見受けられるが、その場合にも旅という場で感傷的な雰囲気が集団をすっぽり包み込んでしまったために、同様の歌が見られるわけで、いわばそこには「場」の力とでもいうようなものが支配している。

同様に前掲の四首が共通して吉野川の遊覧を詠むのも場の力の支配にかかわるものである。さらに、「場」の力の支配についていえば、「羈旅作」の歌群で、

背の山に直に向へる妹の山事ゆるせやも打橋渡す (二〇七)

妹に恋ひわが越え行けば背の山の妹に恋ひずてあるがともしき

(二〇八)

人ならば母がま愛子そ麻もよし紀伊の川の辺の妹と背の山

(二〇九)

吾妹子にわが恋ひ行けば乏しくも並びをるかも妹と背の山

(二一〇)

と妹山背山が飽くこと無く繰返し詠まれている点に端的に示されて

いる。

場の力は同時同所のものにだけでなく、時空を隔てても受け継がれている。

(イ)引馬野にはほふ榛原入り乱れ衣にははせ旅のしるしに(一五〇)

(ロ)草枕旅行く君と知らませば岸の埴土にははさましを(一六九)

(ハ)住吉の遠里小野の真榛もち摺れる衣の盛り過ぎゆく(七二五)

(ニ)古にありけむ人の求めつつ衣に摺りけむ真野の榛原(七二六)

(イ)は大正二年、持統天皇三河行の時の長忌寸奥麿の歌、(ロ)は持統天皇難波行の折の一首で清江娘子の作、左注に「長皇子に進る」とある。(ハ)は撰津作、(ニ)は羈旅作とあるものの一首である。それぞれ時と場を異にした作であるが、行旅という点と、旅の記念に榛や埴土で衣を染めるという点で共通している。旅で異郷の風物に接し、旅愁を覚えた人々が、その心情を具象化して衣を染めると表現したわけで、それは旅における人々の共通の心情であった。(ロ)は土地の娘子の作ではあるが、この共通の心情に基づいての詠である。「旅行く君と知らませば」と仮定表現をとっている点、何よりもそれをよく示している。唯、(イ)は「にはほふ」であり、(ハ)は「摺る」とある点、後者はより生活的である。このように旅という場が人々に共通の心情をもたらし、時と場を越えて受け継がれているものとして、次の場合も同様である。

荒栲の藤江の浦に鱧釣る泉郎とか見らむ旅ゆくわれを(三三三)

網引する海子とか見らむ飽の浦の清き荒磯を見に来しわれを

(七二七)

浜清み磯にわが居れば見む者は白水郎とか見らむ釣もせなくに

(七三〇)

潮早み磯廻に居れば漁する海人とや見らむ旅行くわれを

(七三三)

順に、柿本人麻呂、人麻呂歌集、作者不明であり、人麿の歌を除いた三首は羈旅作の中にある。四首に共通にあるのは「あまとか見らむ」という句だが、自分は海人でもないのに海人と見られるかも知れないと想像すると、たまらなく「われ」が意識されてくる。この「われ」は海辺を旅ゆくわれであるが、「われ」を自らが対象にすえて眺めた時、たまらなく「われ」を感傷に誘ってしまうという心情は、旅ゆく者の心に共感の渦を時を越えて広げていった。山に囲まれた大和の人々にとって、見慣れない海辺の光景はより強く「旅ゆくわれ」を意識させたに違いない。その他玉や貝を拾う(七二四・二五・二五・二五・二五・二五)という発想には、衣を染めめる心情と共通のものを見い出すことができる。

場の力は時を同じくしても、また時を隔ててもそれぞれに人々の心に働きかけたわけで、行旅歌群はこの二つが錯綜する形で成り立っている。しかも、この場を荷なう人々は、「伊勢従駕作」(二〇八)とか「藤原卿作」(二二五)とかの左注に明らかなように、当時の官人たちであった。しかも、行旅の内実は殆んどが行幸従駕であったように思われる。従駕官人たちは日常生活の場を離れた異郷にあって、家郷を思い、恋人や妻、家人を思っては感傷に耽ったこともあったが、巻七の行旅歌群では異質の風土に接した感慨、遊覧の気分が支配的である。旅の不安や苦しさと、旅の与える孤独が自己の心中に深く分け入るような要素もなく、むしろ、不安や苦しさを払拭したある余裕すら漂っている。このことは旅の内実を物語っていよう。旅の不安や苦痛を意識する傍らで風景を賞美することなどあり

えまい。心にゆとりがあつてはじめて自然を美的対象にすえることが可能であるからだ。とすれば、このような旅は当時にあつては従駕をおいてありえないと思われる。

このことは賛歌的要素の指摘できることにおいても立証されよう。

わが紐を妹が手持ちて結八川またかへりみむ万代までに(二二四)

吉野川石と柏と常磐なすわれは通はむ万代までに(二二五)

皇祖の神の宮人とこころづらいやとこしくにわれかへりみむ(二三)

(二三)

馬酔木なす栄えし君がほりし井の石井の水は飲めど飽かぬかも(二二六)

(二二六)

若狭なる三方の海の浜清み行きかへらひ見れど飽かぬかも(二二七)

(二二七)

馬並めて今日わが見つる住吉の岸のはにふを万代に見む(二二八)

(二二八)

「飽かぬ」という不満を表明して、結果として対者を讃えるという図式や「万代」という時(永遠)の觀念を導入して賛美するのは賛歌の常套である。よく知られているが、吉野行幸の折、人麿は「この川の絶ゆることなく、この山のいや高知らす、水たぎつ滝の都は見れど飽かぬかも」(一七三)と歌い、その反歌でも、「見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む」(一七七)と詠んでいる。また、人麻呂歌集にも「いにしへの賢しき人の遊びけむ吉野の川原見れど飽かぬかも」(九七三)ともある。一方、左大臣長屋王宅の肆宴で、元正天皇は「はたすすき尾花さかぶき黒木もち造れる室は万代までに」(八一三七)という室寿ぎの歌を残している。

女郎花秋萩まじる蘆城野は今日を始めて万代に見む(八一三三)
たまくしげ蘆城の川を今日見ては万代までに忘らえぬやも(八一三三)

(八一三三)

右の二首は、大宰の諸卿大夫や官人たちが、筑前の蘆城の駅家で宴したものだが、先の元正天皇の歌とも併せて考えると、この種の歌の場は多く宴席であつたと推定できる。しかも、先掲作者不明の六首は三首までが吉野での作であつてみれば、その宴は従駕でのものと思われる。もちろん、従駕のみとはいきれないのは、先掲筑前蘆城の駅家での作のあることから明らかである。だが、その多くは従駕の際、「万代」「見れど飽かぬ」「かへりみむ」といった賛歌の習慣のないいまわしを用いて、その宴の席に供されたものであつた。

従駕の際歌が献呈されたことは明らかであるが、その場は宴席に限られていたわけではない。天平六年二月、難波に行幸があつた折、多くの歌が奉られたが、その左注には、「右の一首は、住吉の浜に遊覧して、宮に還り給ふ時に、道の上にて、守部王の詔に応えて作る歌なり」(六九七)とあるように、即興で詠まれたものも多くあつた。巻七の行旅歌群の場合も、宴席とか即興とか一首一首區別することは不可能であるが、それらの場で詠まれたものの総体であることは断るまでもない。

先にも、場を支配する雰囲気のようなものがあつて、それが場と共にする人々、さらには時を隔てて同様の場にある者を類同の世界に誘つたのだと述べたが、その中で自然が観照の対象となっているのは大きな特色といえる。

皆人の恋ふるみ吉野今日見ればうべも恋ひけり山川清み

大海の水底とよみ立つ波の寄らむと思へる磯の清さ(7二三)^(7二三)

前者は誰もが慕っている吉野の自然に触れた感激を、後者は磯にうち寄せる波濤に爽やかさを感じての詠だが、このように観照という形で自然が意識されてくるのは、明らかに自然の受け入れ方、見つめ方の変化といえる。この点は別稿で考えたいと思っているが、ともあれ、自然が美の対象として認識されている面は、他の行旅歌に皆無ではないが、巻七の行旅歌群を他のそれと大きく隔てている。この行旅官人の集団は、いはば新しい自然の発見者だったわけだ。新しい自然観は彼等集団に共感され、その集団に気運のようなものとしてあったのだと思われる。

五、結

宮廷に関与した人々の歌を眺めてみると、八世紀初頭、二期から三期にかけて空白期間が存在するが、その空白をうめるものが巻七の行旅歌群であろうと考えてきた。それは巻七編纂以前に、すでにあるまとまりを持ったものとしてあり、それらに類同性が見られるのも、旅という場で彼等が共有の感情をいだいたからだと思う。しかも、類同性の中に、自然が観照の対象となっている点のあることは、他の行旅歌群と違った大きな特色といえる。巻三や巻九にも若

干同種のものはあるが、これらも巻七と同一の地平に考えることができる。このように考えてくると、巻七を中心とした行旅歌群の万葉史上の位置はかなりはっきりしてくるし、自然を観照の対象にするようになった初期のものとして、この歌群の意味も明らかになつたと思われる。

注(1) 「吉野讃歌の背景——人麿と天武朝」古典と近代文学六号

(2) 「宮廷讃歌の系譜」上代文学論叢所収

(3) 「神亀の宮廷歌人赤人」学燈社国文学十一卷十三号

(4) 「柿本人麻呂」和歌文学講座「万葉の歌人」所収

(5) これは家持の予作歌(18四六—18〇〇)なので、或はこの年に行幸はなかったのかもしれない。

(6) 拙稿古代文学六号

(7) この点を詳説されたのは、森淳司氏の「万葉集卷二人麻呂歌集歌一首——渡瀬昌忠氏説をめぐって——」国語と国文学昭和四八年一月号である。

(8) 「場」の問題は、中西進先生の「万葉集の原点」文学・語学五〇号に詳説されている。

(9) 「万葉集における新しい自然の発見——きよし・さやけしの世界——」国語と国文学四九年七月号